

博士論文審査の要旨

論文提出者氏名 倉田 徹

倉田徹氏の論文『小さな冷戦』の終結？—『一国二制度』下の中港関係は、1997年の香港返還以降、「一国二制度」方式のもとでの中国大陆と香港との関係、すなわち中港関係を、分裂国家の再統一の過程として分析したものである。倉田氏は、中港関係を、イデオロギーや軍事面での直接的対立や、大規模な民族の分断、冷戦状況を利用した国内の資源・人材の動因を欠くものの、社会主義陣営と資本主義陣営の分断によって、両者の間には感情的な対立と相互不信が存在した「小さな冷戦」状態にあったと特徴づけた。本論では、「一国二制度」という、統一を実現しつつも分断を温存する方法によって、中国が香港を「一国」の下にどのように統一しえたのか、香港と中国大陆との感情的な対立をどの程度まで解決しえたのかを、制度の検証と返還後10年間の政治過程の分析によって明らかにした。

本論文は二部構成であり、詳細は以下のとおりである。

第1部『『一国二制度』と国家の統一』は、「一国二制度」の下で中央政府がどの程度まで香港を制御しているのかを分析した。

第1章「香港政治エリートに対する中央政府の統制力：『港人治港』の実態」は、中央政府が人事権を行使しえない香港に対して、どのような経路で制御を確保するのかを分析した。中央政府は香港の選挙制度に制限選挙を導入することで、表面的には不干渉の状態をとりながらも、行政長官選挙や立法会の議員構成をコントロールした。一方、香港基本法（返還後の香港の小憲法）は制限選挙を将来的には撤廃し、行政長官選挙と立法会選挙に普通選挙を全面導入することをうたっていた。このため、香港の政治エリートは民意を無視することはできず、中央政府の統制が機能不全となる事態も出現した。

第2章「香港の民主化と中央政府の統制力：『高度の自治』の限界」では、普通選挙の導入をめぐる議論に焦点をあて、中央政府が香港に許容した「高度の自治」の範囲について考察した。本章では、2003年から2004年にかけて香港政府が主導していた政治制度改革の過程が、徐々に中央政府が主導する展開になったことが指摘された。また、普通選挙の全面的導入のためには、香港社会で親政府派が支持拡大に成功することが必要であった。

第3章『『防壁』の中の自由：『一国二制度』における『擬似国境』の政治性』では、返還後、香港のメディアが返還前の予想と比較して「自由放任」の状態にあることを指摘し、さらにその要因を分析した。しかし、中国大陆と香港との経済関係の緊密化に伴い、両地を跨ぐ越境現象も拡大している。本章では第2章を受けて、香港の「防壁」の中の自由が今後中国大陆の社会や政治に変化をもたらす可能性がますます高まることを指摘した。

第2部は第1部を受けて、主に香港が北京との和解に向かう動きを分析した。

第4章『『繁栄と安定』：中港融合の原動力』では、返還後に香港と中国大陸との間に友好的な関係が維持された理由を、経済的側面を視野に入れて分析した。返還過渡期から10年間の香港の動向は、香港の「繁栄と安定」のために双方が政策を調整する過程であると考えることで、より一貫性を持って理解することができる。

第5章『『愛国者論争』：香港人と愛国心』では、香港市民の香港人アイデンティティとナショナリズムの問題を検討した。香港市民は香港人意識とともに中国人としてのナショナリズムを共有していた。「愛国者」を厳密に定義すれば、中央政府は香港市民や保守派を非難することになり、「愛国者」を緩く定義すれば、民主派もまた「愛国者」に包摂された。本章は、中国大陸と香港の「愛国」の内実には差異があるが、中央政府が「愛党」を強制しないかぎり香港市民の間でナショナリズムは求心力を有すると指摘した。

本論は返還後の香港の動向が、返還前の予測とは対照的であったことを多面的に考察した力作である。本論は同時代史であるため、一面では資料的制約のつよいテーマである。倉田氏はインターネットを通じて広範に香港の地元紙を閲覧し、自身で現地事情の詳細なデータベースを構築した。その一方で、倉田氏は地域の事情紹介にとどまるのではなく、比較政治学的な分析枠組みの構築を目指した。序論で倉田氏は香港が「分裂国家の統一」の事例であることを強調し、その上で改めて中港関係を分析しようとした。本論の特徴は、地域事情の詳細な記述と、政治学的分析がバランスよく配合されていることである。両者を結合させるのが、倉田氏の豊富な現地経験である。氏は2003年から3年間在香港日本総領事館に専門調査員として赴任し、混沌とした現地情勢に迷わされることなく、理論の筋道をたてている。本論は、香港的経験が中国大陸の民主化に影響を及ぼす可能性を指摘したものであり、中国国内政治分析に一石と投じるものである。また、香港論としても独自性がでてきている。第5章では香港人アイデンティティを論じる際に、香港市民の中国ナショナリズムの問題を愛国心、日本観と絡めて掘り下げることで、その多層性を描き出した。

他方、審査においては次のような点への不満が寄せられた。複数の査読者が指摘したのは、「中港関係」を「冷戦構造の終結」で説明することの妥当性である。副題にまで「冷戦」をつけるのであれば、冷戦史についての記述が必要であるとの指摘がなされた。また、中国の国内政治と香港政治とのリンケージが指摘されいながら、中国の対香港政策については単体として分析している点についても不満が寄せられた。このほか、政治学的説明に比重を置いたため、香港の地域研究的な説明がやや省略された点が指摘された。

しかしながら、いくつかの弱点はあるものの、本論文が持つ学問的価値が減じられるものではない。本論は2つの発展の可能性を有する。1つは「中国の一部としての香港」を意識し、中国研究の中に香港を有機的に位置づけることである。もう1つは比較政治学的手法を用いて他地域の事例と検討し、政治学的知見を提示することである。

したがって、本審査委員会は倉田徹氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。